

# 判断力にかかわる社会科の学習評価

～パフォーマンス評価による真正な評価とルーブリックの開発～

Einschätzung der Beurteilungsfähigkeit mithilfe einer Performanceevaluation  
im Lernprozess der Sozialkunde in der Primarschule

岩田 睦巳\*・原田 信之\*\*  
Iwata Mutsumi and Harada Nobuyuki

## 要 旨

『小学校学習指導要領』(2008年)に示された社会科の各学年の目標は、従来の「調べたことを表現する」から「調べたことや考えたことを表現する力」に変わり、評価の観点も変わった。一つの評価の観点として、思考力・判断力・表現力の「3つの力」をセットにしてあるのは、社会科のみである。しかし社会科教育においてこれらの力は、見えにくい力、評価しづらい力とされ、子どもの学習状況の評価については曖昧さを残してきた。こうした現状に対する改善策として、「パフォーマンス評価」など新しい評価の考え方や方法が開発されてきた。これらの研究により、学校現場でもその重要性が認められつつある。本来、指導と学習評価は一体化して開発されるべきである。本研究では、社会科学学習における思考力・判断力・表現力の育成にかかわり、パフォーマンス評価の考え方を拠り所として、パフォーマンス課題を中軸にした単元構成と学習過程、評価の在り方について実践化のための考察をする。

## I. 本研究の目的

前学習指導要領までは「調べたことを表現する」とどまっていた学習活動について、2008年版小学校学習指導要領における社会科の各学年の目標は、「調べたことや考えたことを表現する力」として示され、調べて考えるところまで到達させてそれを表現する力を育成することとした。

従前において「表現力」をどのように評価してきたかといえば、学んだことを新聞や絵地図、イラストなどに描かせ、それを評価材料にしてきた。新たな評価の観点として示された「社会的な思考・判断・表現」の「表現」をどのように評価するのか。これらは思考や判断の過程で表現されたものを評価するのか、それとも結果として表現された媒体を通して評価するのか。また、実際に、子どもたちにどう思考させ、判断させ、表現させた結果として評価していくのか。

子どもたちに「思考力」「判断力」「表現力」の3つの力を確実に身に付けさせるために、パフォーマンス課題を組み入れた問題解決的な学習として、社会的事象相互の関係や意味を思考

したり、問題の解決に向かって方法を選択したり、価値を判断したりする力を身に付けさせていく授業展開を構想する。

こうした授業改善を進めるには、社会的事象の特質を的確にとらえた評価規準の分析が必要である。一般に学習評価には、単元の目標の到達を目指す形成的評価、あるいは、単元や学年の終了時に行われる総括的評価などがある。実際の授業ではペーパーテストが採用されることが多く、社会認識として獲得された事実的な知識を評価するにとどまっている。学校現場ではこのような評価が常態化している。ここに思考力・判断力・表現力の真正の評価はほとんど存在しない。

こうした実態を改善するために、パフォーマンス評価を導入し、授業改善を図ることを大きなねらいとしている。本稿では、子どもが社会的事象に現出する諸問題に対し、思考と判断を繰り返してその事象を解明するために必要なパフォーマンス（活動的知性）に着目し、社会科における授業展開の構想について検討する。

\* 岐阜大学教職大学院・羽島市足近小学校

\*\* 岐阜大学

## II. 評価規準の分布からみた実態

### 1. 単元指導計画上の評価規準の分析

社会科における評価規準は、社会的事象にかかわる関心・意欲・態度、思考・判断・表現、資料活用の技能、知識・理解の4つの観点にしたがい設定される。本校（羽島市立足近小学校）の社会科単元指導計画に設定された評価規準の分布状況を整理・分析すると、以下のことが明らかになった。

まず、整理・分析の方法としては、小学校3年生から6年生までの社会科単元指導計画に記載された評価規準を4つの観点にしたがって分類し、分布状況を把握する。4観点のうち、思考・判断・表現についてはどの力に重点をおいた規準として定められているかを判別し分類する。

分類した結果として、3年生のケースでは、関心・意欲・態度については7%、思考・判断・表現は33%、資料活用の技能は41%、知識・理解は19%の割合で評価規準は配分されていた。

4年生のケースでは、関心・意欲・態度について10%、思考・判断・表現は29%、資料活用の技能は34%、知識・理解は27%の割合で配分されていた。

5年生の単元指導計画では、関心・意欲・態度は16%、思考・判断・表現は29%、資料活用の技能は31%、知識・理解は24%の割合で評価基準が配分されていた。

6年生のケースでは、関心・意欲・態度については11%、思考・判断・表現は24%、資料活用の技能は33%、知識・理解は32%の割合で配分されていた。

どの学年においても、思考・判断・表現については約30%の比較的高い割合で評価規準が設定されていることが明らかになった。これは、本校が社会的な見方や考え方を高める授業づくりを授業研究のテーマにし、思考・判断の過程を重視した学習活動を中軸においた単元構成を共通項にしてきた結果と考えられる。

### 2. 思考・判断・表現の観点内分布

次に、思考・判断・表現の観点について、評価規準の内実を分類することにした。これは、従来は「思考・判断」としていた観点到、「表現」

が加えられたからである。「思考・判断・表現」の観点として3つの要素で構成した場合の実践課題を浮き彫りにする意図からである。

思考・判断・表現の学習過程は、端的に3つに分類することができる。第1の学習過程は、思考したことを他者と議論し合う中で表現する授業である。第2の学習過程は、思考したことを表現する授業である。第3の学習過程は、事実をもとに表現する授業である。

第1は、思考・判断・表現の3つの力を発揮する授業である。例えば、「～なのに、どうして～だろうか？」として定式化できる課題について、ある課題追究の視点をもって調べ考えたことを他者に表出する。他者と共通性や相違性を見出しながら思考したことを表現する授業である。

第2は、第1のような課題を設定したとしても、個別で考える授業を行う。考えたことは全体の場で表出させるだけで、他者と話し合い、吟味させることはない。

第3は、表現力に重点を置く授業である。学習した足跡を新聞や提案文といった文字言語で表現し、それをを用いて音声言語で発表する授業である。例えば、「～について新聞でまとめましょう」という課題が提示される。

本校では上記のように学習過程を捉えていた。しかし、改めて評価規準を整理・分析して言うことは、「子どもが判断する場面」が授業構想の中に十分に入っていない点である。評価の観点は、思考・判断・表現として一体的に示され、それにしたがって評価規準も設定されているはずでありながら、実際の単元指導計画では、この一体性が必ずしも反映されていない状況にあることが判った。評価規準として十分に表記されていないために、「判断」にかかわる評価とそれを高める授業の開発がなされていない。学習過程において「判断」を働かせる場面を組み込み、単元構想を工夫する必要がある。

### 3. 学習課題設定上の問題点

「～なのに、Aさんが～したのは、なぜだろうか。」定型文とも言えるこの課題設定文は、本校のみならず、岐阜県社会科の授業において不易とまで言われるものである。この課題文は、

Aさんの行為・行動の意図や背景を追究することで、社会生活を構成する人間の生き方を考えさせることを重視している。つまり、この学習課題を通して、実生活で生きて働く社会的な見方や考え方を培うという授業である。

しかし、授業はAさんの行為・行動の範囲で終了してしまうことが多く、ここで培った社会的な見方や考え方が身近な社会生活に活用されるかどうかは、子どもに委ねられている。さらに言えば、学習過程において、真正の文脈（ありありとした現実味）に照らし、子どもが「判断」を働かせざるをえなくするような学習課題になっていない。

### Ⅲ. 判断力に対する真正の評価

#### 1. 社会科における判断力

判断とは、広辞苑によれば、一般的に物事の真偽・善悪などを見極め、それについて自分の考えを定めることとされている。判断力とは、他者の思考をインプットし、真偽や善悪、合理性などの視点から自分の見解を明確にすることと捉えられることができる。

判断力は実生活においても、授業においても問われる。しかし、授業中に問われる判断力は、実生活に生かされる判断力と比べると、ほとんどにおいて、ほど遠いものである。このことを踏まえて、判断力の育成方法に着目し、判断力に対する真正の評価を見出すことが必要である。

#### 2. 真正のパフォーマンスに着目した評価方法

子どものパフォーマンス（知的活動性）に着目することを促す教育評価研究の考え方を、アメリカのウィギンズ（Wiggins）の提起からみしてみる。これは、学習過程に「判断」の場面を組み入れ、そこで発揮される力、また、思考や表現と連動した「判断」を評価するのに有効であると考えられる。

ウィギンズは、真正の評価について次のように述べている。

「真正の評価とは、大人が仕事場、市民生活、私生活の場で『試されている』、その文脈を模写したり、シミュレーションしたりする課題に取り組みさせる中で子どもの学びを評価する考え方

である。」<sup>1</sup>

ウィギンズは、学校で子どもたちはドリルの勉強ばかりして、将来、遭遇するであろう本物の学習や仕事を知ることなく、学校を卒業してしまうことを危惧していた。こうした事態を改善するために、ウィギンズは、「パフォーマンス」を直接的に評価する「パフォーマンス評価」に着目したという<sup>2</sup>。ウィギンズの提起する「パフォーマンス」とは、知識や技能を用い、特定の課題や文脈に対応しながら、ある作品を生み出すことを意味する<sup>3</sup>。

また、ウィギンズによれば、パフォーマンスは、それを引き出すことのできる課題により評価が可能になるのであり、このことに着目し真正のパフォーマンス課題について説いている。ここで言うパフォーマンス課題とは、知識や技能が実生活で活用される場面やその領域の専門家が知を探究する過程を追体験するものとしている<sup>4</sup>。ウィギンズは、全てを本物の状況に置くこと、即ち、現実のフィールドにわざわざ出向いていくことを絶対条件にしているのではなく、本物をシミュレーションし、現実味を感じることができる状況設定でよいと捉えている。

これを思考力・判断力・表現力等の育成とかわらせて考えると、課題解決のためにはどのような知識が有効なのかを識別したり、必要な情報を選び取ったりできる力を駆使し、可能な限り本物に近い状況の中で「判断」させていく学習過程が展開されなければならないということになる。つまり、この状況を出現させるパフォーマンス課題を開発し、そこで発揮される力の評価を位置付けた単元構想を行う必要がある。

#### 3. パフォーマンス評価の特質

パフォーマンス評価の特質について、佐長・真子は、ギップス（Gipps）の論文に基づき、以下のように整理している<sup>5</sup>。

①パフォーマンス評価は、評価したいものを本当に評価しているかという妥当性は高く、高いレベルで技能等を評価することがある。

②伝統的なテストが、評価したいものを正確に測定するという信頼性を重視し、妥当性を犠牲にしてきた。しかし、パフォーマンス評価は

信頼性を犠牲にしても、妥当性を重視するものである。

③パフォーマンス評価の課題は、一般化の可能性が低いことがある。すなわち、ある課題におけるパフォーマンスの評価が高くても、同じ領域で別の課題に対して、同様に高いパフォーマンスが期待できるとは言えない。

④パフォーマンス評価の実施においては、学習者及び教師の負担は大きい。しかし、教師の評価技能を高めたり、カリキュラムに注目させたりすることに効果的である。また、学習者の力を高めたり学習範囲を拡大したりすることも期待できる。

⑤パフォーマンス評価は実施する状況に強く依存していることに注目したい。場合によって、評価結果は信頼性を低くすることがある。小グループあるいは大きな集団で行うのか、口頭あるいは文書や資料によって課題を提示するのかなどの違いが、その原因となる。

⑥実際にパフォーマンス評価を実施するには、教師に参考資料を提供したり、トレーニングしたりするなどのことが必要となる。これ以外にも、対象者となる学習者のすべてなのか、抽出して評価するのか、評価範囲の大小などの検討が必要である。

佐長・真子の整理から、パフォーマンス評価を学校現場に導入した際に起こりうる問題点を想定しておきたい。

一つには、⑤の「実施する状況に強く依存している」という点である。授業において「実施する状況」は、学習課題に起因するところが大きい。「判断」にかかわるパフォーマンスを発揮させることに焦点を当て、真正の文脈という点において課題が十分に考案・精選されていなければいけない。この学習課題の設定（パフォーマンス課題の精度）こそが事を決するという点である。

二つには、目標と評価との間にずれが生じる点である。パフォーマンス評価は、単元目標を達成させるための手段ではない。従来の授業研究の議論では、「本時に身に付けるべき社会認識は何か。」「本時に高めたい社会的な見方や考え方は何か。」といった問いが中心であったが、

真正の評価に迫るパフォーマンス評価の趣旨からすると、その問い自体がかみ合わなくなることが出てくる。

いずれにせよパフォーマンス評価を導入するには、以下のことが要件になる<sup>6)</sup>。

①精選されたパフォーマンス課題の作成  
(本質的な問いへの転換)

②パフォーマンス課題のシナリオ作り

③評価を合理化するルーブリックの開発

これらに留意しながら、単元指導計画を開発する必要がある。

#### IV. 「判断」力に対する授業改善

##### 1. 社会科の先行研究にみるパフォーマンス評価

佐長・真子は、社会科におけるパフォーマンス評価について、「現実的な社会的論争に参加し、よりよい社会を形成しようと議論することを直接的に評価するものでなければならない。そうすることが学習者の市民的アイデンティティを、その一方で社会をよりよいものにしていくための価値判断や議論の力を総合的に評価し、育成することを可能にする」<sup>7)</sup>と述べている。

本来、パフォーマンス（知的活動性）には発揮される能力の多様な側面や、要素化されて切り離して捉えられていたスキルを複合的・輻輳的に活用する実践知性として説明されることが多かった。このことからすれば、佐長・真子の主張は、論争、価値判断や議論に傾注したものと言えるだろう。彼らにすれば、本物の状況におかれていなくても、社会的な価値を判断する状況に身を置く場面を設定する、つまりシミュレーションすることは、社会的実践と同様であると捉えることができるというのである。また、議論を行うということそのものが社会的実践に参加しているという意味となるのである<sup>8)</sup>。

社会的な価値を判断する状況に身を置くという点では、パフォーマンス課題として描けるかもしれない。しかし、どんな社会的な状況を設定するのか、また、どのような社会的な論争の視点を埋め込むことができるのか。そのハードルはかなり高く、困難である。また、仮に価値判断の「ルーブリック」を設計するとすれば、どのような能力を取り出してそれを行えばよい



のであろうか。より高度な学習活動にも汎用可能なパフォーマンス評価として、今後の実践に期待したいところである。

## 2. ルーブリックの必要性

パフォーマンス課題に取り組む際に、その評価基準をどのように設定すればよいのか、そこに必要とされるのがルーブリックである。ルーブリックの必要性について、西岡は以下のように述べている。

一つ目は、パフォーマンス評価の原理からである。ルーブリックについて次のように定義する。「ルーブリックとは、成功の度合いを示す数段階程度の尺度 (scale) と、尺度に示された評点・標語のそれぞれに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語 (descriptor) から成る評価基準表) であり、この記述語には、パフォーマンスのレベルを規定する基準 (criteria) と、場合によっては徴候 (indicators) を含む<sup>9)</sup> としている。ルーブリックとは、パフォーマンスの成功・達成の度合いの幅を測定するものさし (採点指針) として説明されている<sup>10)</sup>。

前述したウィギンズによる「真正の評価」を見える形で評価するには、ルーブリックが必要となる。ルーブリックに基づいて評価すれば、見えにくい、評価しにくいとされてきた思考力・判断力の評価に一定の妥当性が得られる。

二つ目は、パフォーマンス課題の設定の方法についてである。ルーブリックによりパフォーマンスの成功、達成の度合いを水準化し、採点指標を示すことにより、その組み合わせからパフォーマンス課題を生み出すことにつながる。図1のように、パフォーマンス課題を考案した後にルーブリックを作成するという方法と、ルーブリックを考案しながらパフォーマンス課題を設定するといった方法が考えられ、パフォーマンス課題とルーブリックが相互に両者を創出するのである。

図1の構想図では、ルーブリックの横軸を採点指標とし、縦軸にレベルを示している。この構想図を使いながら、パフォーマンス課題とルーブリックの具体を考案していく。

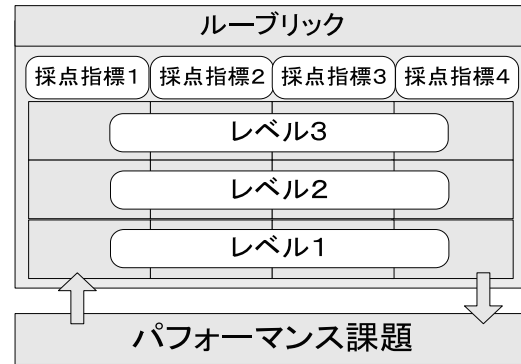


図1 パフォーマンス課題とルーブリック構想図

## 3. パフォーマンス課題の作成

小学校学習指導要領において社会科は、児童の発達に応じて「地域社会や我が国の国土、歴史などに対する愛情を深めることを通して、社会的な見方や考え方を養い、そこで身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して」改善が図られた。そのためには、「作業的、体験的な学習を重視し、生活の基盤となる知識・技能を習得させるとともに、それらを活用して観察・調査したり、各種の資料から必要な情報を集めて読み取ったりしたことを的確に記録し<sup>11)</sup>、比較・関連付け・総合しながら再構成する学習の充実が求められている。このことを次のように整理することができる。「習得した知識、概念や技能などを活用して内容を再構成し、知識を構造化して新たな概念を生み出すのである。」<sup>12)</sup>

社会科で重視されるべきゴールは、「新たな概念を生み出し」、新たな社会認識を獲得することにある。その過程において、思考力・判断力を伸ばすために有効な単元を構成するために、パフォーマンス課題を組み入れた授業展開が考えられるのである。

では、ルーブリックに基づくパフォーマンス課題の作成はどのように行えばよいのだろうか。事例を具体的に描いてみる。ここでは、西岡による「予備的ルーブリック」<sup>13)</sup>の作り方に基づく。本事例では、資料の読み取り方に関するルーブリックを示す。

まず、資料の読み取り方にかかわる3年生から6年生までの系統を描く。それに基づき、児

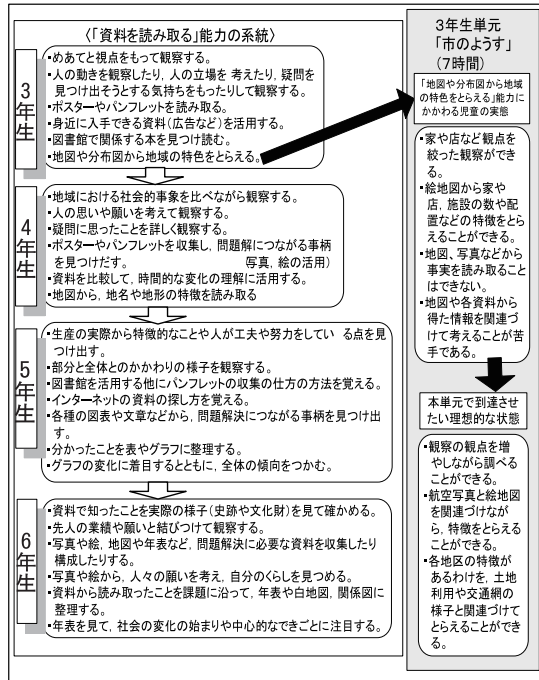


図2 予備的ルーブリックの事例

児童の実態と単元終了時に到達させたい理想の状態を示す。下記は、第3学年「市のようす」の事例における指標である。

図の中央には、各学年における「資料を読み取る」能力の系統を示している。右側上には、「資料を読み取る」能力のうち、第3学年の「図や分布図から地域の特色をとらえる」に焦点を絞り、予想される単元学習前の児童の実態を示している。右側下には、本単元で到達させたい児童の理想的な姿を示した。

この図2と前述したルーブリック構想図(図1)に基づいて作成したルーブリックが、以下の図3である。

事例2 「市のようす」におけるルーブリック			
	(ア) 地図から事実を的確に読み取る力	(イ) 地図から得た情報を関連づけて考える力	(ウ) 地図にある条件を関連づけて考える力
3	地図にある情報をさらに分析し、自分に必要な情報のうち2種類以上を使って読み取りができる。	地図の特徴を他の資料(グラフ等)と結びつけて考える読み取りができる。	地域によって特徴がある理由を、地形条件・交通条件と関連づけて考える読み取りができる。
2	地図の一部分に注目してその特徴を2つ以上とらえていく読み取りができる。	地図の一部分に着目して、その共通性や相違を考える読み取りができる。	地図上にある土地利用の特徴を比較しながら、共通性や相違を考える読み取りができる。
1	地図の一部に着目し、事実を1つ読み取ることができる。	地図の表題から、資料の大きな内容の相違を読み取ることができる。	地図上にある土地利用の特徴を読み取ることができる。

図3 ルーブリックの作成例

この図のルーブリックは、図2の本単元で到達させたい理想的な状態の部分について作成したものである。図の数値は、3が優れている、2が合格、1は頑張りが必要、という基準である。3つの柱を立て、上部に地図読み取りの要となる力の視点を示した。3の優れているは、単元終了時に到達させたい理想的な状態を示している。2の合格は、単元終了時までには到達させたい合格ラインである。1の頑張りが必要は、単元学習前に予想される子どもたちの実態を表している<sup>14</sup>。

このルーブリックの例とパフォーマンス課題をどのように関わらせ、真正のパフォーマンス課題とルーブリックを作成することができるのだろうか。まずは、社会科特有の学習活動にするために、パフォーマンス課題をどのように扱えばよいのかを考える。

西岡は、単元の中核となる知識を「本質的な問いに転換する」<sup>15</sup> が必要であると言う。「本質的な問い」とは、一問一答では答えられないような問いであり、問いに答えるために様々な問いが派生するものである。この「本質的な問い」は、様々な文脈で活用できるものであり、単元を越えて繰り返し現れるような問いである<sup>16</sup>と述べている。

事例1と2にある「市のようす」に基づき作成したパフォーマンス課題は、以下の通りである。

「あなたの学校がA県の小学校と交流会をすることになりました。お互いのことを知るために、まずあなたが住む市のようすについて紹介することになりました。あなたの市のようすを地図を使って紹介しましょう。」

この単元では、方位や地図記号を知識として学習しながら、地図の読み取り方という技能を身につけていく。そして、自分の地域の特徴に気づき、地域を誇る意識を育てていく。課題意識を膨らませ、身に付けた知識や技能を駆使しながら、自分の市のようすを他者に伝えていくことが意図されている。本単元で身に付け発揮させたい力は、「地図を活用する力」である。この地図を活用する力について、図4で設定したルーブリック(評価基準)の上から説明する。

地域の特徴を地図から読み取るには、方位や

パフォーマンス課題				
あなたの学校がA県の小学校と交流会をすることになりました。お互いのことを知るために、まずはあなたが住む市のように紹介することになりました。あなたの市のようすを地図を使って紹介しましょう。				
ルーブリック				
評価基準	(ア)地図から事実を的確に読み取る力	(イ)地図から得た事実を関連づけて考える力	(ウ)地図にある条件を関連づけて考える力	パフォーマンスの事例
3	地図にある情報をさらに分析し、自分に必要な情報のうち2種類以上を使って読み取りができる。	地図の特徴を他の資料(グラフ等)と結びつけて考える読み取りができる。	地域によって特徴がある理由を、地形条件・交通条件と関連づけて考える読み取りができる。	(ア)市全体には田が広がり、稲作を中心とした農業が盛んである。また、中心部には、市役所や図書館、市民会館といった公共施設が集まっている。市内の南には県内唯一の新幹線の駅があり、他県とつながる役割を果たしている。 (イ)市全体には、水田が広がり、米作りやレンコンづくりなど水利を利用した農業が行われている。市の農作物のグラフと結びつけると、多くの作物が生産されている。 (ウ)私たちの市は2つの一級河川に囲まれている地形を生かして、米作りやレンコンづくりなど水利を利用した農業が盛んに行われている。市内には、県内唯一の新幹線の駅があり、他県とつながる県民の南の玄関として多く利用されている。
2	地図の一部分に注目してその特徴を2つ以上とらえていく読み取りができる。	地図の一部分に着目して、その共通性や相違を考える読み取りができる。	地図上にある土地利用の特徴を比較しながら、共通性や相違を考える読み取りができる。	(ア)私たちの市全体には田が広がり、稲作を中心とした農業が盛んである。また、水利を利用したレンコンづくりも広く行われている。 (イ)私たちの市は、どの町も共通して、東西を2つの一級河川に囲まれた輪中地帯である。 (ウ)私たちの市の中心部には、公共施設や鉄道、大きな道路があり、中心部を囲むように田が広がっている。田では稲作が行われている。
1	地図の一部に着目し、事実を1つ読み取ることができる。	地図の表題から、資料の大まかな内容を読み取ることができる。	地図上にある土地利用の特徴を読み取ることができる。	(ア)私たちの市には、田が多く広がっている。 (イ)私たちの市には、田が広がる地域と家が多い地域の2つの地域がある。 (ウ)私たちの市には、田で稲作が行われ、市の中心部では公園や図書館などの施設が多く集まっている。

図4 単元「市のようす」におけるパフォーマンス課題とルーブリック

地図記号といった知識と、方位と縮尺、高低から特徴をとらえる技能が必要とされる。また、土地利用や交通網といった地形条件や気候条件、地域の産業や人の暮らしに関する見方も必要となる。このような知識、技能、見方を駆使しながら地域の特徴を複合的に読み取っていく、より高次の技能を指導することができるよう設定したのが、図4のルーブリックである。

図4の左側には、図3で例を挙げた評価基準を示している。右側には、実際に子どもが表出すると予想されるパフォーマンスの事例を示している。

(ア)では、地図から事実を的確に読み取る力を評価する。地図上にある地図記号に着目し、その方位にある土地利用の事実をとらえるといった読み取りである。この読みとる力の理想状態を児童が表出する言葉で言い表すと、「市全体には田が広がり、稲作を中心とした農業が盛んである。また、中心部には、市役所や図書館、市民会館といった公共施設が集まっている。市内

の南には県内唯一の新幹線の駅があり、他県とつながる役割を果たしている。」となる。

(イ)では、地図から得た情報を関連づけて考えることができるかどうかの力を評価する。地図内から読み取ることのできる2つ以上の事実の比較・関連、これらの事実が埋め込まれている地図と別の資料(グラフや写真等)との比較・関連を行うことに発展する読み取りである。この理想状態としては、「市全体には、水田が広がり、米作りやレンコンづくりなど水利を利用した農業が行われている。市の農作物のグラフと結びつけると、多くの作物が生産されている。」とする読み取りが表現される。

(ウ)では、地図にある条件を関連づけて考える力を評価する。地図上の地図記号に着目し、その方位にある土地利用や交通網の実態をとらえる。そこから、地域の産業や人の暮らしをとらえていく読み取りである。理想状態としては、「私たちの市は2つの一級河川に囲まれている地形を生かして、米作りやレンコンづくりなど水

利を利用した農業が盛んに行われている。市内には、県内唯一の新幹線の駅があり、他県とつながる県民の南の玄関として多く利用されている。」といった読み取りが表現される。

次に、(ア) を例にして、水準について説明する。

3の「優れている」の段階（理想の状態）では、「地図にある情報をさらに分析し、自分に必要な情報を得る読み取りができる」としている。ここでは、田や畑といった〔農作物の分布〕などの〔土地利用〕、図書館や市民会館等の〔公共施設の分布〕、新幹線、私鉄、国道等の〔交通網の様子〕など、地域の特徴にかかわる要素から2種類以上の要素を取り上げて表現していれば、3の「優れている」の判定とする。図4のパフォーマンスの事例のうち評価基準3の(ア)では、「田の広がり」、「公共施設の集まる位置」、「他県とつながる新幹線」といった3種類を使いながら表現していることを挙げている。

2の「合格」の段階（中位の状態）では、「地図の一部分に注目して、その特徴を2つ以上とらえていく読み取りができる。」としている。ここでいう「特徴を2つ以上」は、同一種であっても2つ以上挙げていけばよいことを指す。地図上に埋め込まれた〔農産物〕、〔土地利用〕、〔公共施設の分布〕、〔交通網の様子〕のいずれであっても、2つ以上の事実をとらえて表現していれば2の段階として評価する。図4の2の水準の(イ)では、〔農産物〕の中から、「田」と「レンコン」という2つの事実を表現している。

1の「頑張りが必要」の段階では、「地図の一部に着目し、事実を一つ読み取ることができる。」としている。地図上にある〔土地利用〕や〔交通網の様子〕などから、一つの事実に着目して表現しているかを評価していく。図4では、「田」に着目して表現していることをパフォーマンスの事例として挙げている。(イ)、(ウ)についても同様に水準を定めている。

この単元では、地域の特徴を確実にとらえて伝えることができているかどうかを評価していく。ここでいう「地域の特徴」は、「市のように」という言葉に置き換えている。市のように「地図を使って紹介する」という課題を設定し、

知識や技能、見方を駆使しながら地図を読み取り、どの情報を選び出して伝えていくのかといった活用する基礎的な力を確実に身に付け、第5学年の国土学習へと発展させる。

## V. 今後の実践課題

パフォーマンス評価の信頼性を高める方途として、ルーブリックの作成があった。このルーブリックの作成により、子どものパフォーマンス（活動的知性）を評価する視点と水準（レベル）が明確になる。これまで見えにくいとされてきた思考力・判断力・表現力の評価に地平を拓く方法として期待は大きい。

単元指導計画上の評価規準の分析から、本校の課題が見つかった。思考力・判断力・表現力の評価をどのように捉え、何を基準に評価するのか、力を発揮する場面を表出させる課題をどのように描き、単元構成にどう位置づけるかなど、再考しなければならない課題は少なくない。パフォーマンス課題を課し、真正の評価を行うには、単元の展開の基本設計を構想し直さなければならない。その前提となるのが、各単元の教育内容（知識・技能）を活動的知性（活用力）から捉え直し、各単元のパフォーマンス課題とルーブリックをセットで作成していくことである。

パフォーマンス評価を組み入れた授業づくりを校内に浸透させるには、思考力や判断力も妥当性と信頼性のある方法でしっかりと評価し切るという姿勢をもち、教員間で共通理解する必要がある。そしてカリキュラム・マネジメントのサイクルに乗せ、2・3年の期間を見積もって実践を行いながら、パフォーマンス課題とルーブリックとの間の調整を図ることが大切となる。

### 【注】

\*1 石井英真 (2002) 「改訂版タキノミーにおける教育目標・評価論に関する一考察」、『京都大学大学院教育学研究科紀要』第50号, p.175。

\*2 ウィギンズについては、前掲石井の論文を参照した。

\*3 同上, p.176。

\*4 同上。



- \* 5 佐長健司・真子靖弘 (2008) 「公民的資質を育成する社会科パフォーマンス評価の開発」, 『佐賀大学文化教育学研究論文集』第13集第1号, pp.157-158。
- \* 6 西岡加名恵編著 (2008) 『「逆向き設計」で確かな学力を保証する』明治図書, pp.17-29。
- \* 7 前掲佐長・真子, p.159。
- \* 8 田本正一・佐長健司 (2010) 「状況論的アプローチによる社会科学習評価の開発」, 『佐賀大学文化教育学研究論文集』第14集第2号, p.82。
- \* 9 前掲西岡, p.24。
- \* 10 西岡加名恵 (2003) 『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』図書文化社, p.144。
- \* 11 香川大学教育学部附属高松小学校 (田中耕治序) (2010) 『活用する力を育むパフォーマンス評価』明治図書, p.38。
- \* 12 同上。
- \* 13 前掲西岡(2008), p.29。
- \* 14 同上, p.27。
- \* 15 同上, p.15とp.18。
- \* 16 同上, p.20。

